



友の会通信

133
2026.09

Vol.30 No.2 通巻133号 2026年9月15日発行(年4回発行)



友の会サミットについて

関東初開催の「友の会サミット2026」が生命の星・地球博物館で開催されます。

「友の会サミット」は、全国の博物館友の会・ボランティア等が集い、活動内容や課題等を共有し、友の会活動の継承や拡大について考えるイベントです。昨年大阪市立自然史博物館で開催されたサミットでは40以上の団体・延べ247名が参加し活発な交流が行われました。今回は前回の議論を深めるもので、関東では初の開催となります。友の会員・ボランティアの方はもちろん、博物館を愛する様々な団体やファンの方に参加していただき、日本中の博物館と協働するコミュニティを盛り上げて行くことを目指しています。詳細は公式サイト (<https://rojohaku.com/summit2026/>) をご覧ください。

ご興味のある方、ぜひご参加ください。

目次

事務局より	2
情報クリップ	2
博物館NOW	3
活動報告	4
行事案内	13

事務局より

2026年度第3回友の会役員会の開催

2026年7月4日（土）に、今年度第3回の友の会役員会が開催されました。

まず、坂本薫さんが新たに友の会役員に加わることが、拍手をもって承認されました。

続いて、先日行われた総会の運営について、振り返りを行いました。効率よく効果的な運営を目指し、今後検討して行きます。

また、2027年度は友の会創立30周年の節目にあたります。記念となる企画として、付箋に友の会へのメッセージを書いていただき樹状図にまとめる案や、「これからの友の会はどうあるべきか」をテーマにしたシンポジウム開催案などが検討されています。今後、会員の皆さまにもご協力をお願いする場面が出てくるかもしれません。ぜひ、ご意見等をいただければと思います。

その他、7月に開催予定の「里山シンポジウム」や9月に開催予定の「友の会サミット」（表紙参照）について、運営等について確認等を行いました。

●友の会運営のお手伝いを募集！

友の会では、運営のお手伝いをしていただける方を募集しています。資料の発送や会計事務、友の会通信の企画・作成、ブログ等での情報発信作業など、ご興味のある方はお気軽に事務局までご連絡ください。特に通信の作成やブログでの発信などはご自宅でもできますので、そういったことが得意な方はぜひ、ご協力いただけるとありがたいです。

よろしくお願いします。

（友の会事務局）

E-mail: kpmtomo@ybb.ne.jp



情報クリップ

友の会会員数：311名（8月1日現在）

正会員：308名／賛助会員：3名

●特別展「しらべて分かった！里山にくらす動物たち」のご案内



開催期間：2026年7月18日（土）～

11月8日（日）

哺乳類、鳥類などの里山の生きものの魅力やくらしぶりの変化などを分かりやすく解説します。多様な生きものについて大人も子どもも楽しく学べる展示を通じ、この先の未来、人と野生生物がどのような関係を築いていくべきか、改めて考えるきっかけを提供します。

●博物館からのお知らせ

最新の情報は、博物館ウェブサイトや公式X（旧Twitter）でお知らせしますので、ご来館の際は必ず事前にご確認ください。

問合せ先：神奈川県立 生命の星・地球博物館

企画普及課 TEL: 0465-21-1515／FAX: 0465-23-8846

・ウェブサイト：<https://nh.kanagawa-museum.jp/>

・公式X：[@seimeinohoshiPR](https://twitter.com/seimeinohoshiPR)

・混雑情報X：[@seimeinohoshiCI](https://twitter.com/seimeinohoshiCI)

博物館NOW

みんなの思い出の場所に

副館長 田代和也

友の会の皆様こんにちは。

今年4月に神奈川県川崎競馬組合（いわゆる川崎競馬場）から異動して参りました。

県職員になってから35年以上の勤務歴となりますが、博物館のような社会教育施設に勤務するのは初めての経験であり、これまでの職場で得てきた経験等から微力ながら頑張っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、東京との都県境にあり、かつての工業都市、労働者の街の雰囲気が残る川崎から県西部の箱根の入口にドンと構える生命の星・地球博物館に赴任して感じたことは、競馬場と異なり小中学生やファミリーが週末を中心に多く来館されるという来場者層の違いでした。

館内のエントランスで大きな恐竜の骨格や熊の剥製などを見て、はしゃいで走り回る子供達や、親子で記念写真に収まる光景、お土産に買ってもらった恐竜のぬいぐるみを手にした子供の姿を見ていると、この博物館に来てくれた皆様の大切な思い出の場所になっていると感じています。

だからこそ、少しでも多くの皆様にご来館いただくことを心にとめながら、わざわざこの入生田まで足を運んでくださるお客様を気持ちよくお迎えできるよう努めています。この姿勢は川崎競馬場に勤務していた時と変わらないものです。

例えば、週末の駐車場混雑日においても、満車によってあきらめてお帰りいただくことを出来るだけ少なくし、ご入場いただけるよう委託事業者の協力も得ながら取り組んでいるところです。

このように日々多くの方々がこの博物館の魅力にひかれ、ここを目指してやって来ていただくのには、学芸員をはじめとする職員の力だけでは難しく、友の会の皆様や多くのボランティアの方々のお力添えがあって成り立っているものです。

これまで世代を超えて多くの方々に思い出の場所として刻まれてきた生命の星・地球博物館が、未来に向かって親しまれていくよう、私も日々努力しますが、これからも友の会の皆様の御理解、御協力をお願いし、挨拶とさせていただきます。



友の会の活動を一緒に盛り上げましょう

学芸部長 山下浩之

友の会会員の皆様、こんにちは。令和8（2026）年4月より学芸部長になりました、山下浩之（やましたひろゆき）です。友の会とは発足当時から、地学グループのイベントに関わってきたことから、役員の皆様や古くからの会員の方は顔なじみかとは思いますが、改めてご挨拶申し上げます。



私はこれまで主に地学グループと共に活動してきました。地学グループでは、学芸員とスタッフが相談して、観察会の行き先や講演会の内容などを決めてきました。観察会では、面白いけどなかなか行きづらい場所や内容、講演会では有名な先生を呼ぶなどして、会員の皆様にとっても知的好奇心を満たせるよう心掛けてきました。一方で煩雑な観察会開催時の受付や保険、交通の調査や調整などの事務処理はすべてスタッフが行ってくれました。すなわち、学芸員と友の会との間で、Give and takeの関係がうまく成り立っているからこそ、ここまで続けてきたのだと思います。

さて、前述の通り私は友の会の発足当時から活動に関わってきたのですが、言い換えれば開館当初から在籍していた学芸員ということになります。友の会の発足当時は、現会長の鈴木さんが事務職員として当館に在籍しておりました。そんな私ももうすぐ60歳です。博物館開館当初の若手だったメンバーが還暦を迎え、じきに世代交代が起きようとしています。学芸員は定年退職すれば次の学芸員が採用されますが、友の会のスタッフについては高齢でやめてもなかなか次の担い手が見つかりません。地学グループのスタッフも高齢化し、今後の活動が危ぶまれます。さらには友の会役員のメンバーも高齢化が進んでいます。是非とも、若い友の会会員の皆様に積極的にイベントに参加し、もしくはイベントを企画して、友の会の活動を盛り上げてもらえればと思います。私もあと数年ですが、友の会活動に参加して盛り上げていきたいと思っています。今後とも宜しくお願い致します。

活動報告（よろずスタジオ）

◆「アンモナイトをなぞろう」

2026年5月3日（日）／博物館東講義室／47名
（大人26名、子ども21名）／協力：田口学芸員
／スタッフ：4名

ゴールデンウィークで博物館が賑わう中、2026年度初のよろずスタジオは、アンモナイト化石の写真から、その輪郭、凹凸、表面の模様などをトレースし、色円筆やクーピーペンシルで思い思いの色を付けるという内容でした。

こういう作業は好き嫌いがあるので「どうかな～」と思っていましたら、やはり作業に集中する人と、早々に興味を失う人とがありました。絵を描くという行為に興味を持ってない方のために、アンモナイトという生き物には興味を持ってもらえるよう、スタッフが積極的に話しかけるとか、別仕立てのプログラムを用意するとかすべきだったと大反省しました。

反対に、熱心に取り組んだ方々では、素敵な作品が仕上がりました。

一時間も集中して取り組んだ我が子を見守ったお父さん、我が子に感心しておられましたが、ずっと待ってあげるその姿勢こそ、素晴らしかったです。親子共に手を動かし、丁寧に下絵を描いて互いに見せ合って確認し、揃って色塗りを開始。双方とも見ごたえのある作品に仕上げたお二人もいらっしゃいました。こんな暖かい関係を持ったご家族の姿に、スタッフは感心しきり、幸せをもらいました。

「よろずスタジオ」は、自然の何かに興味を持ってもらうため、小さなきっかけを提供するのが目的です。その視点を忘れず、参加した誰もが「来て良かった！」「一つ新しい事を知った！」と思ってもらえるプログラムを工夫し続けたいと思います。

さて、報告はここまで、次はお願いします。博物館活動に興味をお持ちの皆様、「よろずスタジオ」には新しい力が必要です。子供好きで、新しい視点を持った協力者は居られませんか～子供達のため、ご自分の考えるワークショップのプログラムを、施設、標本、学芸員さんの協力を素材に、実現しませんか。

友の会へのご一報をお待ちしています。

（スタッフ：赤堀千里）



ふ～ん、いろんな形のアンモナイトが生きていたんだね～



下からのライトでよく見えるね



どれどれ、原画とズレてないかな？



だんだん出来上がる

活動報告（サロン・ド・小田原）

◆自然史アーカイブス—書いて描いて撮った研究者の記録—

2026年5月9日（土）／西側講義室／30名／
講師：大坪奏氏（当館学芸員）・田口公則氏（当館学芸員）・川島逸郎氏（標本画家・昆虫研究家）・星野和子氏（郷土研究家・友の会会員）

企画展「自然史アーカイブズをひらく」（2026.2.21～5.10）が開催されました。今回のサロン・ド・小田原では、この展示では語りつくせなかった部分を掘り起こし、3つの興味深い内容を話題として4人の話題提供者が熱く語ってくれました。

【トークセッション：話題その1】話題提供：大坪奏氏『描かれたキノコたち—今関六也資料の裏側—』

自然史研究は、野外観察に始まり、標本を採集し、研究成果へつながります。この過程で生まれてくる写真、スケッチ、フィールドノート、原稿、手紙などの資料を整理し、将来に活用できるようにしたものを、企画展では『自然史アーカイブズ』と名付けたというお話からスタート。

菌類学者・今関六也（1904～1991）が描いた外国の菌類図鑑の模写や、学名が書き直されたスケッチから、新種発表までの試行錯誤や思考の過程が読み解けるというアーカイブズならではの面白さが紹介されました。

【トークセッション：話題その2】話題提供：田口公則氏『40年前のフィルムが結んだ新たな“像”—松島義章資料と新技術—』

松島義章氏（1936～2021）が1984年に鎌倉で撮影したタイワンシラトリなどを含む化石層のスライド写真16枚から現在は消滅してしまったこの発掘現場を、「フォトグラメトリ」という最新技術を使って3Dモデルとして立ち上げたお話です。

3Dモデルにより、貝が水流によって流されて堆積した様子が立体的に判明しました。さらに、写真では判別できない「貝の種類の特定」を、もう一つのアーカイブズである当時の「フィールドノート（野帳）」の記録が補完したのです。松島氏が残した数千箱近くに及ぶ膨大な資料のうち、今回利用できたスライドフィルムや野帳も、標本と同レベルの価値を持つ『自然史アーカイブズ』であるとまとめられました。



左 川島逸郎氏 右 星野和子氏

【トークセッション：話題その3】聞き手：大坪奏氏 話題提供：川島逸郎氏、星野和子氏

『小田原の百年前を歩く—奥村定一の日記と地図の照合作業—』

画家で昆虫の生態に詳しい川島さんと、小田原の郷土史に堪能な星野さんによる謎解きのお話です。奥村定一コレクションから「1927.5.05 小田原」のラベルがついたトラフトンボ（現在は神奈川県内で絶滅）の標本が発見されました。しかし、その小田原とは、いったいどこの小田原なのかが謎でした。

そこで、アーカイブズである奥村氏の「小田原転地日誌（病氣療養中の日記）」の記述に川島さんが注目。星野さんが当時の小田原の古地図と照らし合わせて考察した結果、ついにトラフトンボが採集された小田原とは、神奈川県の小田原であることがわかったのです。さらには奥村による三連結して飛んでいるのを見たという記述も、深く検証され、当時の小田原城周辺の環境を推察できたという、まるで歴史ミステリーのようなお話でした。

最後に、川島氏が「神奈川県のカンムシの普通種の消滅はスゴイ（危機的である）」と言われたことが心に残りました。

このリレー形式のトークセッションの後、熱心な質問が続き、時間を10分ほどオーバーしてサロンは終了しました。話題を提供して頂いた4人の先生方に感謝を申し上げます。（飯島俊幸）



左 大坪奏氏 右 田口公則氏

活動報告（植物グループ）

◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2026年5月23日（土）／座間市 座間谷戸山公園
／15名（スタッフ含む）／担当：植物グループ

「身近な植物観察入門」は2020年秋に始めた、初心者を対象に植物好きを増やしたい、という企画です。細かい事や難しいことより気楽に植物に親しんで欲しい、と毎回博物館集合、周辺を2時間ほど歩くという定点観察に近い観察会でした。5年たち参加者と植物グループの担当者が一緒に植物を楽しむというスタイルが定着してきました。今年から他の場所でも実施することにしました。観察場所の県立座間谷戸山公園（座間市）は名前の通り、谷戸の地形を生かした公園です。園内には湧き水もあり、湿地の周囲には広い林が広がります。今回はそのごく一部を歩きました。

公園入口の立派な長屋門を入ると、その前には田んぼと湿地が広がります。参加者からも「駅から10分とは思えない！」との声が上がります。田んぼ周辺では最近は見える機会が減ったコオニタビラコが黄色いかわいい花をつけていました。春の七草のホトケノザというのはこのコオニタビラコのことで、大勢の人が七草がゆにして食べたのだから昔はたくさんあったのが、田んぼの減少と共に減ってしまったのでしょうか。ヤブタビラコとの違いなど、質問も次々と出て相変わらず参加者は熱心。ギシギシがあぜ道のあちこちに。観察するにはいい時期でルーペを使って花被片のギザギザを覗きました。ギシギシ・ギザギザ、と呪文のように皆で言って田んぼの縁を歩き新たなギシギシを見つけ、ちょっと覚えた気になりました。



コオニタビラコ（キク科）

今日の目玉の一つはアカシデ、イヌシデ、クマシデのシデ類3種です。公園なので場所によっては剪定が強く高木になっておらずアカシデとイヌシデの果苞を手にとって観察でき観察者を喜ばせました。アカシデひとつだけを見ている時は何となく納得していない参加者も次にイヌシデを見ると、「あ、違う、違う！」と納得していただけた様でした。花の少ない今日の観察会で、かわいい花の1つがミゾカクシで5枚の花弁が1、3、1枚とわかる花の形も面白く、雄蕊が合着して1本のように見えるのが確認できました。この時期、雄蕊の中にある雌蕊はまだ外からは見えませんでした。湿地に多いコウヤワラビも「この色と形がいい」という方もいらっしゃいましたが胞子葉はまだ見られませんでした。



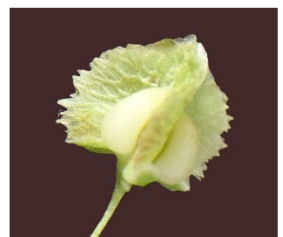
ミゾカクシ（キキョウ科）

湿地からちょっと離れ、林にホソバナライシダを見に行きました。繊細な形の美しさに皆さんカメラを向けていました。その後、湿地に戻りヨシの葉耳、カヤツリグサ科のゴウソの茎の三角、イネ科のチゴザサなどを急いで観察して時間切れ。今日はここまでで終わりとなりました。参加者から次回はこの続きを見たい、という声もありました。

春の花が一段落してちょっと地味な観察会でしたが何でも楽しむ参加者と担当者、あっという間の2時間でした。（植物グループ：小久保恭子）



左：ギシギシ（タデ科）



右：縁にギザギザがあるギシギシの花被片

◆植物観察会「箱根、精進池～芦之湯へ」

2026年6月10日（水）／足柄下郡箱根町／20名
（スタッフ6名含む）／講師：田中徳久学芸員／担当：植物グループ

小田原駅からバスに乗り六道地蔵に向かう。途中、バスの窓を濡らす雨粒もみえ、少し心配になる。精進池周辺は濃霧のなかにあり、各人、ヤッケや雨具をあわただしく着こみ、観察会が始まる。

思えば、鎌倉時代の旅人は湯坂道を経て、当時、噴煙のあがる殺伐とした【賽の河原】と呼ばれるこの地で、さぞかし心細い思いをしたことだろう。

全員で挨拶をかわし本日の行程、ポイントの確認。田中徳久学芸員から本日の観察会の主眼の1つ、フォッサマグナ要素特有の植物群の話の伺う。

はじめに、そうした特有植物のひとつカナウツギの花を全員で確認する。枝は細くジグザグに曲がり、枝の先に白い小さな花が開いている。

他にも多くの花があるが、なんと言っても、箱根町の花、サンショウバラ。下見の時は蕾だったが、今回は大きく開き、濃霧の中にあってもその輝きは増すばかり。

豊かな自然を育む林の中に入っていく。霧は濃い、幸いに雨は落ちることはない。各自、目が慣れてくると、普段は何気なく通り過ぎてしまう、小さな植物がいとおしく、あちこちで質問が続発する。ヒメヘビイチゴの可愛い花、キクムグラの葉腋から伸びた花。露に濡れて輝きを強めるハコネイトスゲも、説明をうけて、初めて、その存在に気づく。

ヒメシヤラより一回り大きなヒコサンヒメシヤラの花弁の白と黄色の雄しべとのコントラスト。白いヤブデマリの装飾花の不揃いな形の愛らしさ。装飾花を持たないコアジサイの白い両性花の潔さ。

今回の観察会は、天気にも恵まれたとは言えないが、それにもまして、静かな、そして熱心な時間を、参加者の皆さんとの協働で実現できた。（友の会 伊藤和良）



カナウツギの細い枝と先端の小さな花



ヒコサンヒメシヤラの存在感



箱根町の花、サンショウバラ



ヤブデマリ、不揃いな花弁の面白さ



ハコネイトスゲの細長い葉

活動報告（土壌動物講座）

◆土の中のムシ ウォッチング

『土の中のムシを探す方法について知る』

2026年6月20日（土）10:00～15:00／博物館実習／博物館実習実験室／32人（講師・講師補佐・友の会スタッフ9人含む）／講師：中森泰三教授（横浜国立大学）／講師補佐：山本知希さん、坂井優太さん、K.T.さん

土の中には、ミミズ類やダニ類をはじめ、大きさも姿もさまざまな生き物が暮らしています。これらは「土壌動物」と呼ばれ、落ち葉や枯れ木を分解したり、土を豊かにしたりするなど、自然の中で大切な役割を果たしています。

「土の中のムシウォッチング」講座は、土壌動物の種類や働き、自然との関わりについて学ぶ講座です。参加者の年齢を問わず、それぞれの理解に合わせながら進めました。

まず、「土の採取」について説明を受けた後、

1. 土の中から生き物を探し出すハンドソーティング法
2. 土の中から生き物を追い出すツルグレン法の二つの方法を体験しました。採集した土壌動物は実体顕微鏡で観察し、その形や動きを詳しく見ることができました。

土壌動物は環境によって生息する種類が異なることが知られています。そのため、どのような土壌動物が見つかるかを調べることで、その場所の自然環境の豊かさや状態（自然度）を知る手がかりとなります。今回は入生田の4か所で採取した土を用い、参加者全員でそれぞれの場所の自然度の程度（レベル）について考えました。

参加者アンケートには、「たくさんの種類の生き物がいて驚いた」「実体顕微鏡で観察するのがとても楽しかった」などの感想が寄せられました。

今回は、横浜国立大学大学院環境情報学府教授・中森泰三先生を講師にお迎えし、一日講座として開催しました。また、ハンドソーティングや顕微鏡観察では、土壌生物学教室の大学院生の皆さんに丁寧なサポートをしていただきました。

講座補助を担当した大学院生の感想

＊講座補助という貴重な機会をいただき、ありがとうございました。実際に参加して最も驚いたのは、子どもたちの好奇心の強さです。一生懸命に土をソ

ーティングし、楽しそうに顕微鏡をのぞく姿を見て、補助を担当して本当に良かったと感じました。また、土の採集の段階から子どもたちにも参加してもらうことで、観察への興味や実感がさらに深まるのではないかと思います。（山本知希さん）

＊今回の講座では、自分自身の反省点もいくつかありました。子どもたちとのコミュニケーションや土壌動物の説明については、もっと工夫できたのではないかと感じています。しかし、実際に観察を通してトビムシの形態の多様さや土壌動物の種類の豊富さに「面白い」と言っていたことは、とてもうれしく、貴重な経験となりました。（坂井優太さん）

＊今回は「土の中のムシウォッチング」で、土壌動物の同定などのお手伝いをさせていただきました。参加者の皆さんが土壌動物に興味を持って熱心に観察する様子が、とても印象に残っています。トビムシやカニムシを見つけるたびに、「これはどんな生き物ですか」「何の仲間ですか」と積極的に質問してくださり、土壌動物を研究する立場として大変うれしく感じました。今回の経験を通して、生き物への興味や学ぶ楽しさを伝えることの大切さを改めて実感しました。（K.T.さん）

私たち講座を企画した友の会スタッフも、実際に土壌動物を研究されている先生や大学院生の皆さんと交流することができ、大変勉強になりました。参加者の幅広い年齢層に合わせて丁寧に接していただき、温かい雰囲気の中で講座を進めていただいたことに、感謝いたします。

講座の最後には、恒例となっている子どもたち（今回は3歳～小学6年生が参加）へのまとめとして、絵本の読み聞かせを行いました。今回は、皆越ようせいさん写真・文による『おちばのしたをのぞ



土の中のムシを調べる方法について

いてみたら…」を紹介しました。読み聞かせが始まると、「これはダンゴムシだよ!」「このトビムシ見た!」と子どもたちから声があがり、講座での体験が確かな記憶として残っていることが伝わってきました。この講座をきっかけに身近な土の中にも多くの生き物が暮らし、私たちと同じ自然の中で生きていることを、折に触れて思い出してもらえたらと思います。(矢野倫子)



ハンドソーティング法を体験



ハンドソーティング法やツルグレン法で見つけたムシを実体顕微鏡で観察



みんなで「おちばのしたをのぞいてみたら・・・」(皆越ようせい作)を読む



「土の中のムシの自然界での働きについて」中森先生のお話を聞きました

神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会 企画講座

土の中の虫ウオッチング

野外実習と室内観察

トビムシのなかま



2026年6月20日

なまえ

テキスト表紙

活動報告（地学グループ）

◆地質観察会「パンニングで鉱物探し」

2026年4月29日（水・祝）10:00～14:00／多摩川（小田急線と泉多摩川駅近辺）／25人（講師・スタッフ含む）／担当：山下浩之学芸員、夏目樹学芸員、スタッフ

少々肌寒く、午後から雨の予報でしたが、お天気は終了までなんとか持ってくれました。

小田急線と泉多摩川駅前で集合後、多摩川の左岸を下流方面に移動しながら、途中、昭和47年9月の台風第16号で発生した洪水の決壊地点に設置された、「多摩川決壊の碑」を見学。山下学芸員の案内で、周囲の地形、後背湿地の様子も観察しながら、当時の洪水被害について学びました。

その後、河川敷（通称、化石島）に移動し、河原の石の観察や、化石の観察、そしてパンニングを行いました。

河原の石の観察では、酒匂川や早川との違いや、同じ種類でも色や質感が異なることなど、多摩川の石の特徴を垣間見ることができました。

また、化石の観察では、二枚貝や植物の化石を沢山見つけることができました。この場所の地層は、約130万年前の上総層群・飯室層で、フィリピン海プレートの沈み込みによる圧力の影響で、南東側に傾斜しており、そこが河川の浸食により露出したとのことです。この周辺では、かつて、ステラーダイカイギュウの全身骨格化石も発掘されており、別の子供たちのグループも熱心に化石を掘り出しては、歓声を上げていました。

メインのパンニングは、昼食をはさみ、夏目学芸員の手取り足取りの丁寧な指導により、参加者2名と夏目学芸員が見事、砂金をGET!!! また、娘は綺麗なザクロ石（天然ではなく工業用のものか？）をGETし、ご満悦でした。

今回は私たち親子も含め、子供連れの参加も多かったのですが、子供たちも日常ではなかなか体験することが難しい、化石の発掘やパンニングを、それぞれ楽しんでいたようです。

今回ご指導いただいた、山下学芸員、夏目学芸員、そしてこのような楽しい観察会を企画いただいた、地学Gの皆様、どうもありがとうございました。

（鈴木悟・美華）

【夏目学芸員追記】

パンニングで採れた赤い粒ですが、偏光顕微鏡で観察したところ干渉色は見られなかったので、ザクロ石だと考えられます。



「多摩川決壊の碑」の状況を説明



参加者で記念撮影



パンニングを実演する夏目講師



見つかった化石（オオツカユキノアシタ）

◆地話懇話会「箱根火山と斑岩鉱床」

2026年6月13日(土) 14:30~16:10/博物館西側講義室/40人/講師：萬年一剛氏(温泉地学研究所研究課長)



講師の萬年一剛氏

「斑岩はかわいそうな石なんです」と、萬年氏は話を切り出した。岩石を成分で分類することが主流となった今日では、半深成岩の影は薄くなってしまった。斑岩最良ではないが、英語名の Porphyry の語源は貴重な染料である貝紫に由来する由緒ある名前なのだそうだ。

火山には、マグマ噴火が卓越するタイプと熱水活動が卓越するタイプとがある。箱根は後者のタイプで、噴火には至っていないが、度々地下にマグマの供給が続いている。まだまだ老いぼれた火山ではないようだ。

箱根では地下 10km 付近のマグマだまりから、ときおりマグマが上昇するが、噴火に至らず、深さ 3km 付近で停滞して斑岩を作る。この斑岩が地下水を温めて熱水系を作る。熱水系の最外殻では、スメクタイトという粘土鉱物が生じ、水を通しにくいキャップロックという構造を造る。キャップロックの下で、熱水は噴気の元となる蒸気と高塩化物水に分かれる。蒸気は上昇して噴気地帯で硫黄を含んだ火山ガスとして噴出し、高塩化物水は山腹から温泉として湧き出す。これは箱根の温泉の泉質が、芦之湯や湯ノ花沢など中央火口丘付近で硫黄泉、宮ノ下や底倉などで塩化物泉であるという観察と一致する。

また、3 km 以深の 400℃前後のところでは、シリカが晶出してシリカシーリングと呼ばれる壁を形成している。2015 年の大涌谷の噴火は、このシリカシーリングを突き破って火山ガスが噴出した結果と考えられている。箱根の火山性地震の震源が 3~6 km 以浅に限られるのも、シリカシーリングより上の硬い岩盤が破壊されることによると考えると、大変納得が

いく。

21 世紀になって浅熱水系鉱床と斑岩鉱床をまとめて斑岩システムと呼ぶようになった。最近の電磁探査では、箱根以外にもいくつか斑岩システムと解釈できる構造が認められている。鉱床にはこの他にも黒鉱鉱床やスカルン鉱床などタイプは様々だが、マグマの活動は重金属などの元素を地表付近にもたらししてくれる。斑岩鉱床でもチリのチュキカマタなど銅の鉱山が知られている。数百万年後、上部が削剥された箱根火山の深部からは、銅などを大量に含んだ斑岩鉱床が現れるのかもしれない。

箱根火山には、これからも熱水活動を地道に続けて、豊かに温泉を作り出しながら、地下の斑岩鉱床にどんどん有益な金属元素を蓄積してほしいものである。

大変 Hot なお話を頂き、ありがとうございました。

(谷 圭司)



講義後、熱心な質疑応答が交わされました



サンプルとして提供された斑岩鉱床を観察した

活動報告（シンポジウム）

◆地話懇話会「里山の動物と私たち～共に生きるために私たちができること～」

2026年7月26日（日）13:00～16:00／星槎ミュージアムシアター／101人／



パネラーと主なスタッフの皆さん

特別展「しらべて分かった！里山にくらす動物たち」に合わせ、友の会主催シンポジウム「里山の動物と私たち～共に生きるために私たちができること～」を開催いたしました。小田原での様々な活動事例をもとに、野生動物と人間が接する里山の現状や生物多様性の保全・管理について多方面から考えを深める機会となりました。

前半の基調講演では、かながわ鳥獣被害対策支援センターの石川智弘氏より「里山に暮らす野生動物と人間の関わり、昔と今」と題してお話をいただきました。江戸時代には県内全域に生息していたシカも、明治初期には著しく減少し、昭和期では保護対象となるなど、時代により関係性は変化してきたとのこと。現在ではシカやイノシシが駆除対象であり、さらにアナグマやハクビシンなどが県内全域を含む住宅地へ生息域を広げている。野生動物と付き合うためには、単なる駆除ではなく「人と野生動物のすみわけ」が重要であることが強調されました。農作物残渣の放置を防ぐことや庭の柿の木の管理、境界領域の草刈り・やぶの伐採による見通しの確保などが具体的な対策として示されました。一方で、地域の高齢化による担い手不足とともに、駆除を求める声の中で「すみわけ」の必要性を伝える理解促進が最大の課題であることが語られました。

後半のパネルディスカッション「里山の未来と私たちの役割」では、石川氏を含め5名のパネリストが登壇されました。それぞれの登壇者から活動紹介を頂きました。NPO法人おだわらいノシカネットの

川島範子氏からは、森林整備や環境保全活動に長年関わってきた経験から、箱根の自然モニタリングと共に「くくりわな塾」を通じた後継者育成活動が紹介されました。小田急電鉄の有田一貴氏は、鉄道会社も野生動物被害の当事者であるという意識のもと、地域と狩猟に興味を持つ方を繋ぐ「ハンターバンク」による持続可能な仕組みづくりを紹介されました。猟師でもある Recovery and Reload の宮本亮氏からは、駆除された命を無駄にせずジビエや高品質な革製品へと昇華させる「命の循環」の取り組みが紹介されました。NPO法人MOTTAIの菅田悠介氏からは、農業、狩猟の体験や食育事業を通じて生産地と消費地の境界を溶かす社会づくりが紹介されました。



左 菅田悠介氏 右 石川智弘氏



パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションにおいては、「害獣」「獣害」という言葉自体が人間本位の視点であることや、海外（ニュージーランド等）における野生動物との共生が地域の強みに繋がった事例が話題となり印象的でした。小田原において野生動物との共生への理解が進む一方で、ジビエ利用が限定的といった課題も浮き彫りとなっている。自然との共生を目指す未来に向けてのメッセージとして、まずは一人ひとりが自然に興味を持ち、大人も子どもも自然を改めて楽しむ姿勢の大切さが伝えられ、非常に実りあるシンポジウムとなりました。（江寄正浩）

行事案内

◆ 植物観察会 『身近な植物観察入門』

植物グループのスタッフと気楽に植物観察をする初心者対象の観察会です。初めての方、会員外の方大歓迎です。

★10月の『身近な植物観察入門』

日 時：10月24日（土）

集 合：博物館正面 前庭 10時

解 散：入生田駅近辺 12時頃

観察地：博物館周辺

参加費：50円（保険料）

講 師：友の会植物グループ

対 象：オープン・どなたでも

小学3年生以下は保護者同伴をお願いします。

持ち物：飲み物・雨具・あればルーペ、虫メガネ等

申込み：友の会のWEBフォームで

WEB申込締切：10/21（水）

（担当からの返信メールはいたしません）

*メールを使わない方は直接担当者へ電話で申し込み下さい。

電話申込：10/19（月）～10/21（水）

期間内の18時～21時に連絡下さい。

担 当：山田 080-3394-5101

雨天等で中止の場合は申込者に担当から電話連絡いたします。

（博物館には問合せないで下さい）



アキノゲシ（キク科）

◆ 植物観察会 「津久井湖城山公園の秋」

県の北部に位置する津久井湖城山公園にて秋の訪れを感じます。

どこか儚げなセキヤノアキチョウジの花や艶やかに輝くガマズミの実が迎えてくれるでしょう。

実施日：10月25日（日） 雨天中止

場 所：相模原市緑区

集 合：JR 横浜線橋本駅改札口付近 10時
（神奈中バス「三ケ木」行きに乗車）

解 散：同駅 15時頃

講 師：田中徳久学芸員

対 象：オープン（どなたでも） 大人20人

参加費：会員 500円 非会員 700円

申込み：友の会WEBフォームで10月18日（日）
までにお申し込みください。

メールアドレスの無い方は10月15日（木）

～10月17日（土）の19:00～21:00の間

に電話で申し込んでください。

電話申込先：松井 090-7411-5024

当日連絡先：松井 同上

橋川 090-6162-2963

*詳細はメール等でお知らせします。



セキヤノアキチョウジとヌリワラビ



ガマズミ

◆地質観察会

「地学小旅行－等々力溪谷を歩こう」

等々力溪谷は、武蔵野台地の南端を多摩川の支流が侵食してできた、延長約1キロメートルの東京23区唯一の溪谷です。危険木の除去や樹林再生の取り組みを行い、令和8年3月に公園としての利用が再開されました。溪谷沿いは、都市部でありながら、武蔵野台地を特徴づける地層断面が観察できる箇所があるため、巡検地として長らく活用されてきた場所です。地図と徒歩で地形を読みながら、武蔵野台地の成り立ちを考えてみましょう。

日 時：11月28日(土)

集 合：9:30 (場所は参加者確定後に通知)

解 散：等々力溪谷公園 午前中 (11時頃)

講 師：西澤文勝氏

対 象：友の会会員のみ

募 集：10名 (定員を超えた場合は抽選)

費 用：100円 (内：保険代 50円, 資料代 50円)

備 考：参加者は指定する文献を各自印刷して持参、
小学3年生以下は保護者同伴

道 程：集合場所→等々力不動尊→等々力溪谷公園
南側→矢川橋→不動滝→北側

服 装：ピクニック程度の軽装

持ち物：筆記用具、飲料、常備薬

申込方法：友の会 WEB フォームまたは往復はがき

はがきの宛先：〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館

地学観察会担当宛

記載事項：行事名・氏名・性別・年齢・会員番号・

郵便番号・住所・電話番号・メールアドレス

申込締切：11月10日(火) 必着

※状況によっては中止の場合も考えられますので
ご承知おきください。

主催：生命の星・地球博物館友の会地学グループ

担当：谷 電話 090-2150-7187

◆よろずスタジオ「菌類グッズで遊ぼう」

菌類ってどんな生き物？

紙芝居、パズル、パタパタカード作りを通じて、
菌類にしたしもう。

日 時：11月29日(日) 13:00~15:00

場 所：博物館一階、講義室東側

対 象：どなたでも

申 込：不要／オープン

参加費：無料

友の会主催行事の参加申込みについて

◆行事案内に申込み方法が指定されていない場合、
往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局
までお送りください。

◆必要事項：行事名／開催日／参加者全員の氏名・
年齢(学年)／会員番号／代表者の住所・電話番号
／指定事項

◆行事案内に申込み方法が指定されている場合は指
定された方法(メール・電話等)にてお申し込み
ください。

◆現在、WEB フォームによる申込受付を行って
います。以下の二次元コード又は URL よりアクセ
スして、申込をしてください。

なお、申込後すぐに「フォームの回答のコピー」
が送られて来ない場合は受付がされていませんの
で、再度申込みをお願いします。それでも「フ
ォームの回答のコピー」が来ない場合は、問合せ先
等にご連絡ください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDqewuG_xlkfHWxkOxP2QdbO46QsdOfZfGyCIP3m8icnKvQg/viewform?usp=publish-editor



注意！

■参加費は友の会会員1名分の金額で、内訳は資
料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記
事項に記載があります。

■オープンの行事は会員以外の方も参加できます
(参加費が会員とは異なる場合があります)。

■小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。

■チラシの発行されない行事もありますので、
直接<連絡先等>へお問い合わせください。

■持ち物など詳細はメール・返信はがきに記載さ
れます。

次号は、2026年12月15日発行予定です

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
Vol.30、No.2、通巻133号 2026.9.15 発行
編集：友の会広報部
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846
E-mail：kpmtomo@ybb.ne.jp
Blog：http://blog.livedoor.jp/kpmtomo
X：@kpmtomo